

「平川の『隊中様』～藤山佐熊(すけくま)」

平川の小出集落では、毎年4月9日に藤山佐熊を慰霊する「平川の隊中様まつり」が行われています。峠の麓の集落でつくる隊中様奉賛会が主催するもので、小出集落ではのぼり旗を立て、参拝者へのお接待もされています。(以前平川小に勤務していた時には同学年でお参りをし、小出集落の公民館で赤飯のお接待を受けましたが、コロナ禍以降は関係者のみによる墓前での例祭のみが行われています。)

今回は、その藤山佐熊の話です。

後に隊中様として人々に拝まれるようになったのは、藤山佐熊(ふじやますけくま)という阿東町嘉年村出身の農民です。彼は明治維新に際し「振武隊」に参加し、戊辰戦争でも活躍しました。振武隊は越後国や東北方面にまで出動し、激戦の中で多くの犠牲を出しています。こうして長州藩は明治維新を無事成し遂げたのです。そして藤山佐熊は大きな功績を挙げ、無事山口に戻ってきました。

こうして戦争が終わり、明治の新しい時代が始まったのですが、新政府は戦時動員によって多くなりすぎた兵隊の数を減らさねばならず、選抜された者だけで常備軍を編成することにしました。

十分なほうびもなく解雇された者たちは生活に困窮し、藩政府に苦情申し立てをしたのですが、彼らの要求は通らず、とうとう諸隊兵士たち約2,200人が徒党を組んで反乱を起こし、武力で要求を通そうとしました。藤山佐熊もこの反乱軍に加わったのです。

藩政府は、彼らの説得に努めましたが解決することができず、とうとう武力で討伐することを決意しました。明治3年2月8日に下関方面に待機させていた藩の常備軍を引き戻し、小郡の柳井田で反乱軍と激戦を開始。陶峠や鎧ヶ峠を経て防府の反乱軍本拠地を攻めました。

反乱軍の一部は平川方面に入りました。藤山佐熊は、鎧ヶ峠付近にいましたが、9日に藩の討伐軍によって撃殺されました。このことについては、諸説あります。

- * 鎧ヶ峠を警備していたシンロクという小人(おそらくこの辺りの地主)が射殺した。
- * シンロクが佐熊に濁酒を飲ませて近くの岩山に誘い入れ、討伐軍に密告した。討伐軍は、水飲み場にいた佐熊を射殺した。

この討伐戦は11日に終わり、反乱軍は壊滅。首謀者35人は小鯖の柵で処刑されました。この内紛が世に言う防長の脱退事件であり、維新史上の大きな傷跡となっています。

さて、佐熊の死後、その墓に参ると病気が治り、願い事が叶うというという話が広まり、彼は「隊中様」と呼ばれるようになりました。参拝者も増え、峠道に茶店が何軒も立ち並んでいたそうです。峠道や墓前には「奉寄進 藤山佐熊源正道」と書かれた紙ののぼりが立ち、茶店ではその紙のぼりや守札を参拝者たちに配ったそうです。その版木は今も小出集落に伝わっています。

明治5年になると、山口県庁の役人が現地に来て、近辺の鳥居や紙のぼりを取り除き、人々の参拝を禁止する立て札を立て、そのことを県下に布告しました。反乱軍兵士の墓が信仰の対象になっていることを良しとはしなかったからです。

しかし、それでも民衆は墓への信仰を止めず、今日でも隊中様にお参りする人が絶えないそうです。

佐熊が人々に親しまれた理由としては、彼が医者であり、村人たちを自分が持っていた薬で治療したから、という説があります。しかし、史談会の徳久さんは、佐熊がまだ22歳の若者であり、医者であることに疑問を感じるということや、戦中において人々を助けるほどの薬を持つことが考えにくいことから、おそらく新政府の方針に反抗する民衆の思いが無念の死を遂げた若者を神としてまつりあげることになったのだろう、と言われていました。

命をかけて遠くの地まで行って戦って帰った若い兵士が同胞によって殺されたことを哀れんだのか、もしくは農村出身者の彼への親近感があったのかもしれません。



参考文献：『郷土史ふるさと平川』（2019）・石川卓美『平川文化散歩』（1990）

